



第 53 号

あざみ 祥子
KCCN 理事

他人ごとではない 気候変動と SDGs

1995 年 1 月 17 日阪神大震災が勃発した。

京都でも激しい揺れに私たちは肝を冷やしましたが、その詳細がまだ定かではない当日、小さな地域の集まりがありました。その中でベテラン主婦たちがつぶやいた言葉が忘れられません。「何かあると思っていたよ」「地球のしっぺ返しだわ」。

その集会のテーマは、気になる一人暮らしのお年寄りに、地元でとれた新鮮な食材を使って手づくりの食事を提供できないか、というものでした。そのためにすでに始まっている他学区の先輩諸氏に教えを乞うべく数名がお手伝いに入っていました。

時代は高度経済成長の爛熟期、加工食品が大量に開発され廃棄され、いわゆるジャンクフードが出回り、家庭料理、おふくろの味もなんだか馬鹿にされているような嫌な雰囲気は漂っていました。2~3 日して、彼女たちは被災地の炊き出しに参加し、被害の深刻さに呆然とし、そして一気に私たちの「食事づくりを楽しむ会—ひまわり」は立ち上がりました。

1997 年 12 月 1 日から 11 日京都において「地球温暖化防止会議」が開かれた。

年々増え続ける二酸化炭素等有害物質によって、私たちの母なる地球が存亡の危機にさらされている。この国際会議を機に、では私たち市民は何ができるか、しなければならぬか、まるで想像を超える世界に思いをはせながら、私たち 7 人の主婦はエコクッキングを始めました。できるだけ自然に寄り添う循環型社会を、食を通して考えようとしたわけです。

エコクッキングとは何か、料理教室を展開し、定期的にニュースを出し続けました。さらに、どうしても食べきれない、あるいは出てしまう食品残渣（生ごみ）をもう一度土に戻す方法を考え、実験し、同じ志を持つグループと交流し、行政、企業、大学、地域の人々、小学校にも手伝ってもらいながら、畑を耕し、花を植え、野菜を育ててみました。皆さんとご一緒に汗を流した記録は、『地球にやさしい、体にやさしいエコクッキング』『どうする！生ごみ』の小冊子になりました。

私たちをここまで駆り立てたものは何だったのでしょうか。ここで出会った人たちは、今もこつこつとあるいは華々しく精力的に頑張っています。

2011 年 3 月 11 日大規模な地震と津波が東北地方を襲った。

頻発する集中豪雨や洪水など気候変動による地球環境の異変は、日本でも実感せざるを得ないまでに顕在化してきました。加速度的にです。

今年 6 月 12 日の大阪北部地震はほとんどの人が予想していなかったと言います。その後、

日を経ずして、千年の都と安心しきっていた京都にも大雨警報が発令されました。続いて連日の猛暑です。自然災害は逃げるしかないと思いますが、逃げようもない真っ赤な炎の中に今私たちは放り込まれてしまいました。農業漁業のダメージも相当なものでしょう。

2015年9月「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が締結された

SDGs といいます。これは貧困問題の解決を目指した国連ミレニアム開発目標を引き継ぐものとして検討されてきたものです。したがって環境問題だけを取り上げたものではありませんが、世界の良識ある人々が議論を尽くし、2030年までに各国がしなければならない17の目標と169の個別課題が明示されたものです。目標として取り上げられたということは現状が極めて厳しいということでもあります。

17の目標の中には「⑦エネルギーをみんなに そしてクリーンに」、また、「⑬気候変動に具体的な対策を」などまるまる環境問題に特化していると思われる分野もありますが、「⑭海の豊かさを守ろう」「⑮地の豊かさを守ろう」のように、実はすべての課題は経済、社会、環境に有機的に関連し合っていると私たちに語り掛けているようです。だから、「これらの問題にすべての人が対応しなければならないと世界が合意した」ということでしょう。

これはすごい事ではないでしょうか。達成できればユートピアです。わが国も官民挙げてこの目標に向かって動き出しました。ゼロからの出発ではありません。それぞれの蓄積があるではありませんか。その上に我々はさらなる知恵を結集できる、しなければならない、できるはずだとひそかに思っているのではありませんか。

理想や目標は高いほど良い。しかも、～誰もおきざりにしない～。そう、私も置き去りにされたくありません。

以上
(2018年7月)